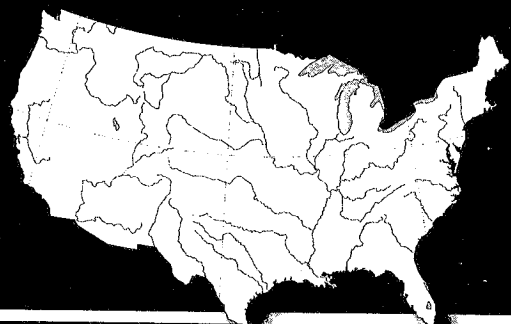


「南京事件」の隠された真実

# 反日宣伝戦を担った 米国人 宣教師 たち



1930年代、蒋介石の国民党は反日宣伝に米国人宣教師を利用していたという。そして宣教師たちは、中国という新天地開拓のために積極的に協力したという。まるで今日の中国共産党と米国ハリウッドの関係のように……。

文／黒木 悟

## 1 宣教師によって 宣伝された 「南京大虐殺」

### 諜報機関に利用されて いた宣教師

近年、いわゆる「南京大虐殺」を国民党の諜報機関による反日宣伝、つまり戦争プロパガンダとして分析する研究が進んでいる。東中野修道教授が台北で発見した中国国民党の極秘文書『中央宣伝部国際宣伝処工作概要』によれば、日中戦争期における対日諜報活動は、「中央宣伝部国際宣伝処」の指揮のもと、外国人エージェントを動員して行われていた。

国民党に雇われていた外国人エージェントとしては、マンチェスター・ガーディアン紙の上海特派員で

あつたハロルド・ティンパリー記者の存在が既に有名だが、彼一人で世紀の「大虐殺」宣伝ができた訳ではない。実は、当時南京に残留していた多数の米国人宣教師や、彼らを支援する米国内のキリスト教団体がティンパリーの協力者となっており、作員の手足となって反日宣伝戦に参加していたのである。

### 「マギーのフィルム」にも 諜報機関の影

いわゆる「マギーのフィルム」とは、南京戦当時、当地に残留した米国人宣教師ジョン・マギーが陥落前後の南京の様子を撮影したとされる16ミリ映画フィルムである。

「大虐殺」の存在を主張する人々は、しばしばこのフィルムを決定的な映像証拠だと主張しているが、実は、現像された「マギーのフィルム」を

最初に手にした人物こそ、国民党の作員たるティンパリーであった。当時、南京ではフィルムの現像がでなかつたため、一九三八年一月末に米国人宣教師ジョージ・フィッチがフィルムを南京から持ち出し、これを上海で活動するティンパリーのもとに持ち込んだのである。

ティンパリーはこのフィルムが反日宣伝に利用できるかと判断するや、即座にフィルムを編集し字幕を追加したうえで、二月十六日付の送付状を当時の米国国務次官スタンレー・ホーンベックに宛てて直接発送している（フィルムは別途使者に持たせようである）。

また、ティンパリーはフィッチに対し、直ちに米国に帰国しマギーのフィルムを利用して政治家や政府関係者に対するロビー活動を行うように提案している。帰国の航空機はテ

ィンパリーの費用で手配したようだが、一介の新聞記者が当時の高額な航空運賃を簡単に用意できたとは思えない。おそらく「中央宣伝部国際宣伝処」から十分な工作資金が提供されていたものと思われる。

### YMCAの集金 キャンペーンに利用

ティンパリーに促されたフィッチは、いったん身辺整理のために南京に戻った後、二月末には中国を發つて渡米し、ティンパリーの指示通りワシントンで政府関係者に対してロビー活動を行った後、全米を巡り反日的講演会を開催した。また、マギーのフィルムはYMCAの反日宣伝映画に流用され、全米で上映された。その映画のラストはこうである。

「緊急な救済が必要とされている。1ドルで成人一人が1ヵ月救済され、

20ドルで子供一人を1年間救うことができる」

実は、フィッチは中国YMCAの幹部であり、「大虐殺」宣伝を自身の集金キャンペーンに利用していた。

## 2 反日宣伝本を執筆した宣教師たち

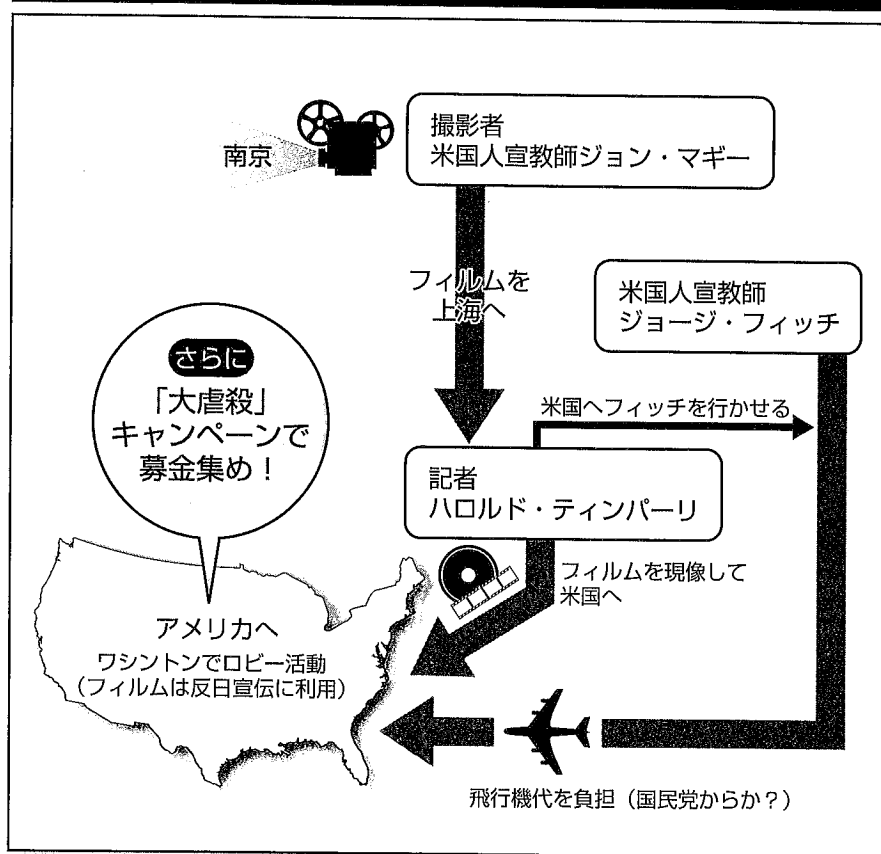
### 「職員との密接な協力関係」

前述の秘密文書『中央宣伝部国際宣伝処工作概要』によれば、国民党国際宣伝処の指示と資金により、米国人宣教師たちは2冊の宣伝工作本を作成した。これらの宣伝本は欧米の読者向けに英文で書かれ、「What War Means」（『戦争とは何か』）及び「War Damage in the Nanking

Area」（『南京地区における戦争被害』）として公刊された。特に『戦争とは何か』は、今日まで「大虐殺」宣伝のバイブルとして頻繁に引用されている。

この『戦争とは何か』の執筆にあたっては、南京の米国人宣教師たち（マイナー・ベイツ、ルイス・スマイスら）が上海のティンパリーと密接に連絡を取り合い、協力していたことが判明している。特にベイツとティンパリーの間では、本書の構想や原稿に関連して頻繁に手紙が交わされており、その一部は日本語に翻訳されて『南京事件資料集——アメリカ関係資料編』（南京事件研究会編、青木書店）に収録されている。『南京地区における戦争被害』については、本文にはスマイスの、序文にはベイツの署名があるが、実際はどこまで本人が書いたのは不明であ

「マギーのフィルム」の流出経路



る。本書の実態は「国民党国際宣伝処」の資金で作成された宣伝工作文書なのだが、表向き「南京国際救済委員会」を発行主体としており、序文において内容の中立性・学術性を殊更に強調する作りとなっている。

なお、ベイツとスマイスは、いずれも南京の安全区を管理したいいわゆる「国際委員会」の幹部であるが、揃って両方の宣伝工作本の作成に関与している。これは「国際委員会」自体が国民党の対日諜報戦略に組み込まれていた可能性を示唆する。

### 『戦争とは何か』出版までの経緯

『戦争とは何か』の基本原稿はティンパリーが上海で書いたものである。宣教師らの役割は、ティンパリーに情報を提供し、上海から郵送された原稿を確認してフィードバックする

ことであつた。しかし、もともと本書の目的は反日プロパガンダであり、ティンパリーには宣教師からのフィードバックを真摯に反映するつもりはなかったようだ。

一九三八年三月、上海のティンパリーから南京に原稿が送られてきた。原稿を読んだ宣教師たちはそのあまりの誇張ぶりに驚き、困惑する。

ベイツは、ティンパリーに宛てた3月14日付の手紙の中でこう述べている（以下、『南京事件資料集——アメリカ関係資料編』360～371頁より）。

「きょう、ミルズとスマイスとともに君の原稿を検討したあと、この件について真剣に相談しました。二人とも、この件はあわててすべきではないと痛切に感じています。イギリスに原稿を送る前に、こちらのグループから誰か（私が適任だと二人は



▲生誕50年祝賀会撮影された蒋介石と夫人の宋美齡（1936年11月撮影—毎日新聞社）

言います）が出かけて行き、君と一緒に作業すべきだ、ときつく言われました。こちらの者が一人もいない

うした印象を持った場合、即刻、心を閉じてしまうからです。本のタイトルには、そのような反応をおこさ

のでは、必ず間違いが起きるだろうし、しかも、いったんおかし間違いは、日本側に反駁の機会を与えるものであり、全体の効果を弱める結果になる」

「上海行きのもう一つの理由は、こちらでは、『残酷物語』風にとられるのをみな恐れています。読者にはそのような印象を持つてもらいたくないものです。そのような印象を

「よい意味で、この本は、ショックングな本とならなければなりません。もつと学術的取り扱いをすることに よって、ある種のバランス感覚もできるとは思うが、ここでは劇的な効果をあげるためにもそれを犠牲にしなければならぬと思うのです」

結局、『戦争とは何か』の出版は、こうしたティンパリーの独断先行を宣教師たちが追認する形で進められた。ベイツは、一九三八年三月二一日付の手紙でこう述べている。

「君の仕事運びの速さに私たちはかなり翻弄されています。（中略）し

かし、ミルズ、スマイスと私の三人

は、考えうる善悪とを比較して検討した結果、責任を持って本の刊行を進めることを了承しました。（中略）

しかし、このことは、フィッチや私、そしておそらくスマイスらにとつても、深くかかわってきたライフワーカーの終わりとなるかも知れません」

この時点で、宣教師たちは腹をくくった……つまり、悪意の宣伝を知りつつこれに協力する決意をしたものと考えられる。

### 編集方針も終始

#### ティンパリーが主導

本書の執筆にあたっては、具体的な編集方針の決定についても終始ティンパリーが主導していたようであり、微修正や削除箇所指摘を除き、編集方針に関する宣教師らの提案はことごとく却下されている。

例えばベイツは、三月十四日付の

手紙の中で、「経済の完全な破綻、永続的な財産や生産手段への被害、人口100万人余の社会的諸機関の破壊の追跡調査は、処刑や強姦より

いわば、もつと基本的なことです」として、怪しげな残酷物語よりも経済的損害を中心に論証すべきだと提案した。しかし、この提案はティンパリーに一蹴され、結局、本書の内容は誇張された「残酷物語」の羅列となる。また、南京における日本軍の行為を「テロ」と呼ぶことについて、ベイツは当初「テロという確証はないが、一部には当てはまるかもしれない……」と慎重な姿勢を見せていた。しかし、最終的にはティン

パリーの提案した「The Japanese Terror in China」（中国における日本軍のテロ行為）」という副題がそのまま採用され、本文の表現もこれ

に応じたものとなっている。

### 宣教師の戦争協力を生んだ背景

上述のとおり、南京の米国人宣教師たちは実にやすやすと国民党の反日宣伝戦に動員され、利用されてしまっている。特に、『戦争とは何か』が誇張に満ちた露骨なプロパガンダ本であること、このような宣伝への協力が正義に反することは、彼ら自身も十分認識していた形跡があるにもかかわらず、強引なティンパリーのやり方に抗議すらしていない。

あえて彼らが戦争プロパガンダ悪宣伝に手を染めた理由は何か……当時の中国におけるキリスト教伝道団の実態を調べてゆくと、ひたすら蒋介石国民党政権に迎合し、日本を敵視する米国人宣教師の姿が浮かび上がってくる。

### 3 蒋介石礼賛と日本敵視

中国の米国人宣教師たちは、1937年に日中戦争が開始するずっと前から、露骨に日本を敵視する傾向があった。中国における米国のプロテスタント宣教師団の活動についてまとめた研究書『Missionaries, Chinese, and Diplomats - The American Protestant Missionary Movement in China, 1890-1952.』(Paul A. Varg著 Princeton University Press 1958) によれば、当時の米国人宣教師の傾向は次のように表現されている。

「中国の米国人プロテスタント宣教師たちは、一九三一年の満州事変勃発時から真珠湾に至るまで、信徒たちを啓蒙することに専心した。そこ

で日本は、中国を隷属させようとする、あらゆる人道的配慮を欠いた冷酷な軍国主義国家として描かれた」(252頁)

「一九三三年五月から三十七年七月まで続いた平穏な日々においても、宣教師たちは日本を敵視し続けた。再び戦火が起ると、宣教師たちは以前にもまして中国最前線になった。この危機に際して彼らが真っ先にしたことは、蒋介石將軍を礼賛することであった」(256頁)

宣教師たちは単に反日的であっただけではない。本来、独裁者であったはずの蒋介石を「將軍」「総統」と礼賛し、日中戦争の開戦後は、宣教師にとつての宿敵である共産勢力に迎合してまで日本を非難した。当時の共産党は宣教師を「帝國主義の走狗」と呼んで攻撃し、排外・反キリスト教テロを煽動していたにもか

かわらず。上記で紹介した『Missionaries, Chinese, and Diplomats』は、当時の空気を伝える以下のような一節がある。

『Missionary Review of the World』の編者は、『今や中国は、史上最も輝かしく、愛国的で、かつ有能な指導者を得た』と言った。また、『New Life Movement』は、総統の妻(筆者注：蒋介石の夫人、宋美齡)による指導のもと、中国人たちがいかに旧弊を排し、かわりに清廉、愛国、自己犠牲といった『キリスト教的』美徳を定着させるべく大改革運動に取り組んできたかを長文記事で紹介している」(255頁)

「あるプロテスタント宣教師は、中国の共産主義者は既に多くのロシア製イデオロギーと暴力の大部分を放棄しており、『今や、彼らは何よりもまず中国人なのであり、彼らの目

的は社会改革運動を起こすことであつて、これは全ての進歩的な人々の希望に沿うものである』と主張した(255頁)

では、このような一般的傾向は一体どこから生まれたのだろうか？

### 4 キリスト教を政治利用した蒋介石

#### 共生関係の成立

もともと、中国におけるキリスト教宣教師活動は成功しているとはいえないものであった。

特に一九二〇年代には、キリスト教徒はしばしば暴力的な排外運動のターゲットとされ、伝道事業は重大な危機に瀕した。ひとたび暴動が発

生すれば、教会やミッシェンスクールは略奪、放火され、宣教師が殺害されることすら珍しくなかつた。

しかも、こうした排外運動の多くは時の政府やソヴェエト指導者による煽動、黙認ないし暗黙の推奨に基づくものだと言われた。蒋介石率いる国民党も例外でなく、政治的思惑から半ば公然と暴力的排外運動を煽っていたのである。

さらに一九二七年三月、蒋介石率いる国民党の北伐軍が南京に入城した際、統制を失った軍が市内で殺人、暴



▲西安事件・蒋介石生還の市民祝賀会の行進。この事件後、蒋介石は大きく抗日に転換したといわれる(1936年12月撮影-毎日新聞社)

## 5 宣伝戦に敗北

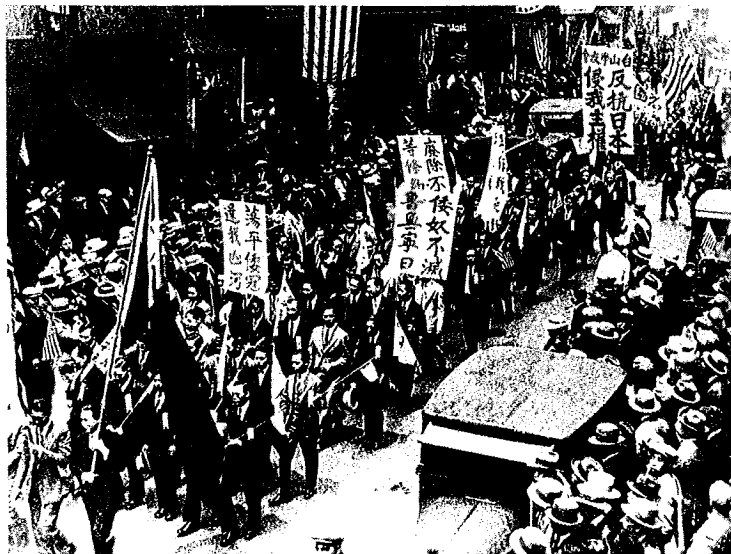
対米外交において、米国人宣教師の持つ影響力は極めて重大であった。米国の外交官であり、一九三〇年代におけるアジア外交の専門家であったジョン・マクマリーは、宣教師と中国国民党の関係について、次のように述べている。

「アメリカにおける宗教組織の強力な党派性は、新聞論調にも反映された。中国国民党は一七七六年（アメリカ独立宣言採択の年）の愛国精神と二重写しにされ、蒋介石は中国のジョージ・ワシントンと目されるこ

理的理由も絡んでいた。集金の都合上、伝道団の親玉が暴力的独裁者であつては困るのである。

とが少なくなかつた。このような動きは、アメリカ議会と行政府の双方に対し、かなりの圧力となつて作用した。」

マスコミへの影響も大きい。例えば、「ライフ」及び「ザ・タイム」誌の創業者であつたヘンリー・ルースは、在中宣教師の息子であり熱狂的な蒋介石信者であつた。当然、両誌は極端に親中国に偏つたスタンスをとり、世論を反日的に誘導した。一九三八年以降、宣教師の音頭による全米的反日キャンペーンは次第に政府、議会、マスコミを巻き込んで拡大し、日米は泥沼の対



▲ニューヨークで在米中国人の反日デモ行進（1932年3月撮影—毎日新聞社）

立に追い込まれていった。日本は宣教師を利用した蒋介石の宣伝戦に敗れたのである。

行、略奪を働く事件（南京事件）が発生し、混乱の中、南京大学の教頭を務める米国人宣教師が、乱入した国民党軍に射殺されるに至つた。

この事件により欧米諸国から激しい非難を浴びた蒋介石は、同年十二月に敬虔なクリスチャンとして知られる宋美齡と結婚し（蔣には既に妻がおり、美齡との結婚は重婚）、後に自らも洗礼を受けて形だけキリスト教に改宗するというパフォーマンスを演じた。

### 飼ひ慣らされる宣教師たち

さらに翌一九二八年、国民党はキリスト教の布教活動を保護する政策を発表し、宣教師たちは蒋介石をキリスト教の保護者、救世主とみなすようになる。ここに、蒋介石が宣教師を保護し、宣教師が蒋介石を礼賛

するという共生関係の基礎が成立した。蒋介石によるキリスト教の保護といても、実際には国民党の独裁体制の範囲内でのみ与えられた保護にすぎない。例えば、宣教師らが運営するキリスト教学校においても、生徒には国民党の党紀綱領を教育することが必須とされ、逆にキリスト教活動や神学の授業を必修科目とすることはできなかつた。さらに党の政策として、毎週月曜日の朝には「国父」孫文を祀る儀式への参加が義務づけられた。

このような横暴な政策にも宣教師たちは従順に従い、真剣に抗議するものはいなかつたという。蒋介石による保護を失うことは、排外テロの標的とされて苦しんだ過去の時代に逆行することを意味していた。また何より、過去に排外テロを煽り、多数の同僚宣教師を殺害した前科を持

つ独裁者にあえて反抗してみる理由もなかつた。

### 集金キャンペーンと中国幻想

一九三〇年代に入ると、中国における伝道事業は過去の排外運動によって受けた損害から回復しつつあつた。しかし、伝道事業は財政的に自立できる段階には達しておらず、不足する多額の資金について米国内土の信者からの寄付金で賄う必要があつた。

多額の寄付を集めるためには、中国における伝道活動の成功を誇り、将来におけるバラ色の展望をアピール（客観的には、中国伝道事業は明らかに斜陽期にあつたらしい）しなければならぬ。蒋介石が「クリスチャン將軍」として宣教師たちから礼賛された背景には、こうした商業